

参加者氏名：我妻 未彩

卒業年：2010年 卒業学部：文学部

### 「現地を訪問し思うこと」

私は、2011年3月11日という日を実家のある仙台市で過ごしました。その後、1週間ほど卒業した小学校の体育館にて避難生活を経験しました。あの日から約5年が経過した今だからこそ震災を俯瞰して見つめてみたい、郷土・宮城県と向き合いたいと思いました。そしてこの度のツアー参加を希望いたしました。

<特に印象的だったこと>

●南三陸にて防災学の講義を拝聴し、「今、この場で自然災害が起きたらどうするか」を想像することの大切さを学びました。震災を学ぶということになりますと、何が起きたのか事実を知ることにも目が向きがちです。それも大切なことですが、過去の景観を元に、未来を考えるという視点は大変重要だと思いました。

●南三陸町、女川、名取、閑上とバスで宮城県の沿岸部を北から南へと移動しました。その際、印象的だったのはバスの窓越しに見た、果てしなく広がる平地でした。土以外は何もない地がたくさんあるのですが、そこにはかつて人が住み、家庭があり暮らしがあったのでしょう。「ここから何かが生まれるだろう」という前向きな佇まいとは違う、物悲しいような印象を感じました。それは被災地に直接来たからこそ感じられたものだと思います。

●『ささ圭』の佐々木ご夫妻のお話を拝聴し、「また震災が起きるかもという危険もあるけれど、事業の再建をしていく」というお話に勇気づけられました。リスクがあったとしても、お客様、従業員の方々のためにも事業を再開させるという御姿勢に「安心立命」のことばを思い出しました。生きていく限り危険はいつも隣り合わせですが、自分の天命のようなものは何かと考えて、全力を尽くしてみたいなと思いました。震災のお話という枠を越え、人生の励みになりお話でした。

●その他、施設『閑上の記憶』での震災語り部の方がお話される御姿勢も印象に残りました。お話の内容はもちろんですが、心を分けてくださるようなお話の仕方に感銘を受けました。思い出すだけでもつらいことを、たくさんの知らない人の前で、声、ことばに託し伝える勇気。震災というものはなぜこのような若い女性に対し、つらい物語を使命を託していったのでしょうか。深い憤りを感じました。それも直接現地に行ったからこそ感じ得たものでした。

●まとめ

宮城県に住んでいても、知らないことばかりだと気がつきました。今までは震災を振り返ることが怖かったです。このたび、震災と向き合う機会をくださいました立命館大学校友会に深く感謝しています。

また若輩者である私に優しく接して下さり、あたたかく迎え入れて下さいました先輩方へ感謝をしております。楽しい会話にあふれ、今思い返しても笑顔になる大充実の 2 日間でもありました。是非、若手、校友会員の皆様にも参加していただきたいです。どうもありがとうございました。

以上